共生社会へ向けた総合支援プログラムの開発（covid19）
報告書

内容

１．プロジェクトの目的と実施概要 ……P.　1
２．動画「パラキャン VIDEO」の制作 ……P.　4
３．テキスト制作 ……P.　9
４．動画教材の評価 ……P.11
５．授業実施後アンケート ……P.28
６．まとめ ……P.36

２０２２年３月　特定非営利活動法人パラキャン

１．　プロジェクトの目的と実施概要

１－１．本プロジェクトの目的

国の調査によると、日本には 16 人に１人は体や心に機能の障がいがあると言われています。そして、それらの人々が生活する上での不具合や不都合は、個人に要因があるのではなく、社会にもあると言われています。誰もが暮らしやすい社会を目指して共生を確立するためには、誰かの困りごとを理解し、日々の生活の工夫を見て、聞いて、知って、何ができるか考えて行動に移す「場と機会」が重要です。それらを教育の中に入れることで、「共生社会」の芽が息づくと考えています。

現在、障がいのある人を含む、共生社会が実現できていない要因には下記があげられます。
〈原因〉
① 障がいが何かを正しく知る機会がないまま大人になり、障がい＝大変と感じてしまう。
② 共生社会がまだ理解されていないため、障がい者の為に何かしなくてはならないと考えている人が多い。
③ 障がい者や高齢者との接点がないため、それらの困りごとに気付くことがない。
④ 枠からはみ出た者を排除する傾向にあるため、当事者やその家族が罪悪感を持ったり、知られないようにする。

そのため、本プロジェクトでは、学校教育でのプログラムとして、下記の具体的な解決策を実施することで、人と違うことを尊重できる子供たちを育成し、共生社会の実現を目指していきます。
〈解決策〉
① 障がい者をはじめとするマイノリティに関してのケーススタディを早い時期に行う。
② 共生社会の在り方を考える場と機会をもつ。（動画を使ってどんなことでより使いやすい物が出来るか考える）
③ 障がいが社会課題であるという視点の共有（動画例・当事者の声からマイノリティの置かれた状況を理解する）
④ 諸問題の対応策を考える。（動画例・タクシーに車椅子利用者が乗る。交差点や駅で視覚障がい者が事故に遭遇しやすい理由を考える。

１－２．実施概要

本プロジェクトでは前項の目的を達成するため、動画制作、テキスト制作、学校での教育活動を実施する。

１－２－1．動画製作

（１）時　期：2021 年４月～2022 年１月

（２）参加者：障がい当事者

（３）マイノリティを紹介・説明する、共生社会を考える、当事者の声からマイノリティの置かれた現状を知る、障がい者用なのに、障がい者が使いにくい物を紹介する内容

１－２－2．テキスト制作

（１）内　容：動画で何を気づかせるのか？児童・生徒の促し方などを冊子にして、動画とともに配布

（２）時　期：2021 年６月～11 月、再制作 2022 年１月～2 月

（３）配布先：動画を活用したい学校や地域

（４）部　数：50 冊　現場の教員がファシリテーションする事を目的としたテキスト。動画による当事者の声をそのまま伝え、その声をどのように広げていけばよいかを提案する。

１－２－3．学校での授業実施

（１）時　期：2021 年 12 月～2022 年２月 15 日

（２）場　所：東京都・大阪府・奈良県・山梨県計６校

（３）参加者：６小学校　１１クラス　２６０名

（４）内　容：出来上がった動画を学校へファシリテーターと事務局で持参し実際の授業を行う。参加する子供たちが飽きないように、3～7 分刻みでプログラムを進める。動画は 5～7 種類ぐらいを作成し、授業の中で少しずつ見せています。1 回目の授業をこちらで行い、2 回目以降は先生たちが実際に出来るようプログラムする。

１－２－４．成果の確認

（１）　動画およびテキストの制作と評価

教育動画と動画を活用するためのテキストを制作し、有識者（大学教授・講師）に課題とその解決策が明確に動画に現れているかどうかを評価して頂く。

（２）　アンケート調査の実施

アンケート調査を実施し、講義を受けた子供たちに、講義の前後でどのような意識変化があったのか把握し、テキストを利用した教職員に対しては、使いやすさや、児童・生徒への指導のしやすさ、動画の意図などの伝わりやすさを検証する。

１－３．検討会議の詳細

本プロジェクトを進めるのにあたって学校教材の作成を手掛ける(株)EDUSHIP や、映像制作に関してはHAZS(株)に協力を仰ぎ、満足のいく成果が出るまで制作会議を繰り返した。動画完成を見据えパラキャン講師陣とも今回の動画を使っての授業を想定した指導方法を確立するためのミーティングを重ね、実際の授業後に更にミーティングを行い、動画の精度を上げるための努力を重ねた。

〈ミーティング実績〉

動画制作ミーティング を HAZS と 4/22、5/ 2 、5 /15、7/27 に計 4 回行った。
また動画と呼応するガイド本と動画のマッチングの為のミーティング、パラキャン（事務局・講師）、HAZS、EDUSHIP の 3 社とディレクターの細村氏で、4/5、4/15、4/28、5 /11、5/21、6/11、6/21、6/22、7/7、7/27、8/5、8/27、8/30、9/7、9/15、9/21、9/30、10/12、10/26、11/9、11/22、12/8 で 22 回行った。 講師の諸隈と高橋とは、別に勉強会を 11/16、12/12、12/27、12/30、4 回行い、その後、評価の西巻氏からの指摘を受け、動画の再編集を行うために、1 /13、1/15、1/17 と更にミーティングを重ね、最終の編集確認を 2/3、2/16 に行った。 また、3/5 には、講師たちと大阪でミーティングを行い、子ども達の目線での質問の仕方や「正解はない」ことをどのように伝えるかがこの動画にとって重要であることなどを確認して、今回の動画制作の締めくくりとした。

２．動画「パラキャン VIDEO」の制作

教育動画「パラキャン VIDEO」は、障がい者個人をモデルにした作品４本、バリアフリーに関する環境の問題をテーマにした作品が１本、ソフトボールに関する動画が１本という内容。

個人をモデルにした動画とバリアフリーに関する動画はそれぞれ、初期の作品と学識経験者のアドバイスを受けて改良した作品があり、新旧動画それぞれを学校での授業に活用し、その結果を評価している。

動画①　モデル：伊藤樹さん

テーマ：「日本代表の未来を背負う16歳」 人生をどれだけ謳歌できるか。

伊藤さんが、交通事故で車椅子での生活になったのち、パラアイスホッケーに出会い、意識が変わっていく様子が描かれる。競技者として目標をもって生きていくことで、障がいがあっても生き生きと生活できること、工夫をすれば環境にある障がいを乗り越えられることなどを紹介している。

動画②　モデル：木島英登さん

テーマ：「空飛ぶ車イス」自分の人生に制限をかけない！

　木島さんは、175 カ国を見て回った経験を生かして、訪日外国人への旅行情報の発信と提供をしている。海外と日本での生活経験の比較などを通じて、違いを考えさせる内容となっており、失敗を恐れずに生きられる、助け合える社会のあり方について語っている。

動画③　モデル：阪根泰子さん

テーマ：「次々に夢を叶える全力ウーマン」動き出せば、幸せは連鎖する。

18 歳の時に、脊髄炎の後遺症で車椅子生活になったのち、車椅子バスケットをするようになり、笑顔を取り戻したことを紹介している。車椅子の生活でも、夢を持ち、叶えられること、様々なことが出来ると言う事を発信している。外出時の手助けの重要性についても取り上げ、声を掛け合える社会の重要性を示している。

動画④　モデル：諸隈有一さん

テーマ：「子どもたちに“自由”を伝える講師」どんな時も笑って生きる

24 歳の時の交通事故で片足を失ったのち、車椅子バスケット選手として活躍する姿などを紹介。足を失う前は自分で生活上の制限をかけていて不自由だったが、今の方が自由に生きていけている事を伝えている。

動画⑤　何が問題

テーマ：バリアフリーの環境づくりに必要な要素について考えてもらう

　障がい者等用駐車スペースの使われ方、電車とホーム間など危険な場所、駅員の手伝いの必要性などから、環境がつくりだす障がいに気付いてもらい、自動販売機のユニバーサルデザインなどを例に挙げ、周りの環境（設備や機器など）が、どう変われば生活しやすくなるか考えてみようという内容。

動画⑥　ソフトボール

内容：障がい者スポーツの普及を目的とした動画

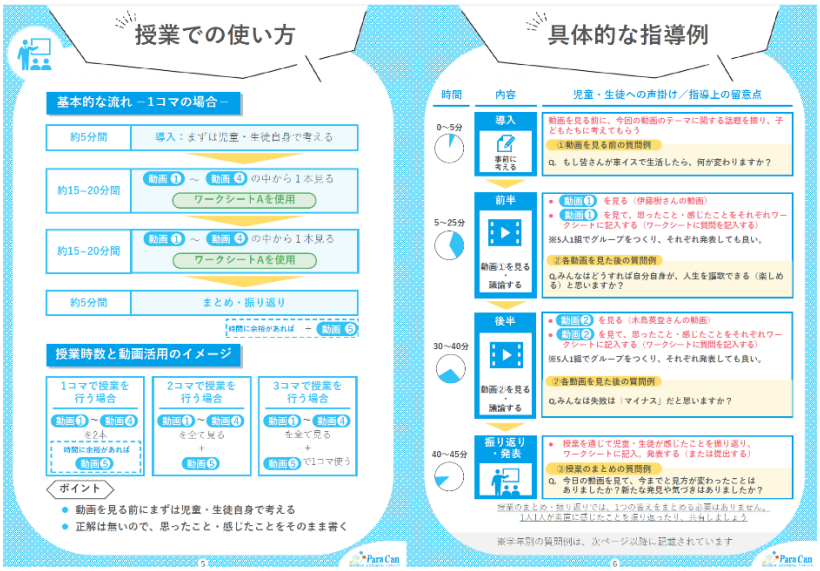
３．テキスト制作

教育動画「パラキャン VIDEO」の動画とあわせて、本テキストを用いる事で、学習効果を高めるためのツール。教育現場で、どのように先生がファシリテーションを行い、ディスカッションを進めるかについてのノウハウを記述し、一方的な知識の学習を超えた学びを実現できるようにしている。

以下主な内容

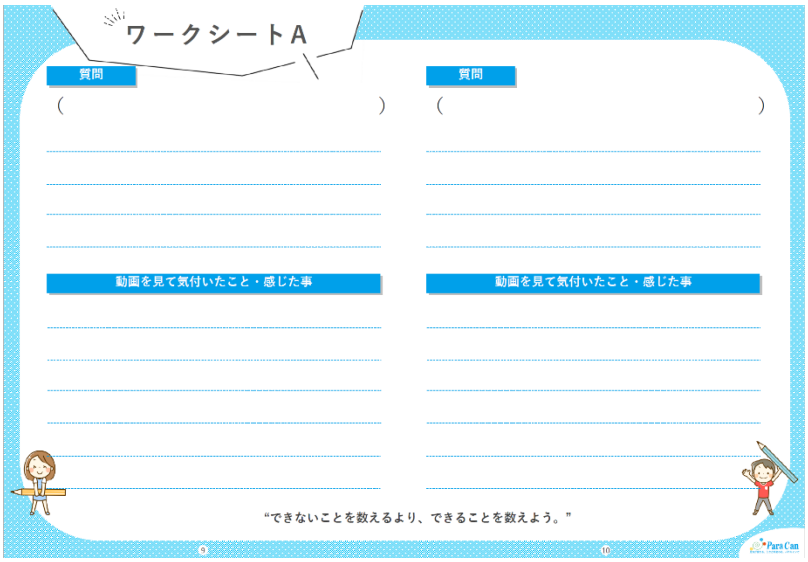
表紙

「パラキャン VIDEO」の目的と概要紹介



授業での使い方紹介

各ビデオ教材の紹介



ワークシート

４．　動画教材の評価

４－１．動画教材の評価方法

制作した動画教材に関して、２名の有識者（関西学院大学教育学部教授丹羽登氏、早稲田大学講師西巻悦子氏）に評価していただいた。

まず、西巻氏に旧動画に対して意見をいただき、そのアドバイスを受けて、そのブラッシュアップ版として新動画を作成し、続いて、その新動画を、改めて２名の有識者に評価していただくというプロセスで評価していただいた。

４－２．評価者のプロフィール

丹羽　登

関西学院大学教育学部・教授。

専門分野：特別支援教育全般、慢性の身体疾患・精神疾患や入院中の子ども教育、障がいのある子どものＩＣＴ活用、医療的ケア、いじめ・不登校等における支援を必要とする子どもへの教育。

西巻悦子

筑波大学大学院後期博士課程単位取得満期退学。

都立高校国語科教諭を経て早稲田大学・昭和女子大学等で非常勤講師を勤める。

専門は図書館情報学、特に学校教育のデジタル化における図書館活用。デジタルアーカイブの授業活用研究。

４－3．評価

４－３－1．総評

総評　（丹羽登氏）

動画の全体構成としては、発言のポイントを文字で表すとともに、質問のあとで考える時間（無音）をとるなど、詰め込み式のものではないので見やすいですね。

2021 年度は、東京パラリンピックや北京パラリンピックがあったので、パラスポーツのアスリートからのメッセージかなと最初は思いましたが、そうではなく各自が生活する中で思っていることを中心にまとめられていましたので、難しい話もなく、よく分かる話が多かったと思います。

また、多くの人から障がいのある人を見た場合、「不自由」や「かわいそう」という同情や哀れみの対象であるかのようなことを言われる人が居ますが、当事者にとっては、そのような視点で見てほしくない、「不便」ではあるけど、「不自由」ではないという事を複数の人が同じように述べていたのが、とても印象的でした。やりたいことがあれば、少々不便でも、周囲の人に助けを求めて、やり遂げていきたいという、強い気持ちをもたれていました。

また、インタビューを受けたのは事故や病気により車椅子生活になった方々ですが、それを契機に、積極的に話をするようになったり、スポーツに取り組む様になったりした人たちですので、見方や行動が大きく変わったのだなと感心しながら見せていただきました。

現在は経団連でも、Ｄ＆Ｉ（ダイバシティ＆インクルージョン）が提唱されており、多様な人がいることを前提とした取組が進みつつあります。

今回の動画をきっかけにして、障がい者手帳は持っていないが支援を必要とする人、なかなか落ち着かない人、うつ状態が長く続く人など、障がいの有無だけでなく、障がいではないが困っている人や悩んでいる人は多くいることを理解し、多様な人が一緒に、そして楽しみながら生活できる社会について、考えて行きたいものですね。

この動画を通して、「障がい」とはなにかを考えるきっかけにしてほしいと思います。

動画の中で、複数の人が「不便だが、不自由ではない」と言っていました。また、自分達が障がい者とも言っていません。日常生活の中では「障がい者」という用語は必要ないし、言ってもらいたくないという人は多いのです。 保護者や関係者の中には、「障がい」と認識されることで、ホッとする人はいます。育て方が悪いのではなく生まれつきだと分かり、ホッとされるようですが、多くの人は我が子を障がい者だと考えているわけではありません。

疾患として、「自閉スペクトラム症」や「限局性学習症」の診断を受けることはあっても、「精神障がい者」とは言われたくないとの声はよく聞きます。

また、手厚い教育やサービスを受けるために行政上は、その対象を明確にする必要があります。そのため手厚い教育の対象となる「障がい者」を法令で定義し、福祉サービスの対象となる「障がい者」を法令で定義しています。しかし、あくまでも対象であって、個々の人を「障がい者」としているわけではありません。

ですので、「自閉症のＡさん」「知的障がいのＢさん」ではなく、「Ａさんはこだわりが強い」「Ｂさんは覚えるのが苦手」などの方が、それぞれの特性が分かりやすいはずです。

一人一人は異なる、「元々特別なオンリーワン」「みんな違ってみんないい」などには共感する人が、理解しにくい人に対しては自閉症や知的障がいというグループにいれて、理解した気になっている人がいます。 例えば、「自閉症」と診断された人の中には、知的な遅れがある人もいれば、ない人もいます。また会話が難しい人もいれば、人の前で講義や演説ができる人もいます。人の多様性を理解していないと、診断名だけでその人のことを決めつけてしまいかねません。 この動画を人生の早い時期に活用することで、障がいの有無に関わらず、人は多様であり、それを尊重することが必要だということを理解する道筋ができると思います。

この動画と活用本は、道徳・総合的学習・福祉等の教科で有効だと思います。

総評　（西巻悦子氏）

動画と活用本が効果的に使えるのは、教科外活動では、担任の先生のロングホームルーム（LHR）やショートホームルーム（SHR）です。児童生徒の社会性を涵養する時間は教科ではなかなか難しいところです。そこで、学校教育の場で見落とされがちな社会性の育成や訓練として使うことができます。

新学習指導要領が、小学校では 2020 年度、中学校では 2021 年度から、高等学校では 2022 年度の入学生から年次進行で実施されます。特に、小学校の学習指導要領改訂で、「道徳」という科目の位置付けになっていますので、本動画と活用本は、「ノーマライゼーション」や「共生」ということを考えさせる具体的な教材となります。

中学校の「総合的な学習の時間」では、道徳教育やキャリア教育との関わりが指摘されています。本動画と活用本は、道徳教育やキャリア教育の導入教材として効果的です。また、中学校の保健体育 1 年体育分野には「運動やスポーツの楽しみ方」が追加されています。そこで、健常者・障がい者の枠を取り払ったスポーツが果たす役割を学ばせるのに本動画と活用本が役立ちます。

高等学校では 2022 年度から公民科に必修科目「公共」が導入されます。それをふまえると、主体的に社会に参画する力を身につけさせるための教材としてこの動画と活用本は最適です。選挙権年齢が 18 歳からに引き下げられたことや、成年年齢が 18 歳になることなど社会の変化が激しい中で、教科横断的な「総合的な探究」においてペアワークによる対話やグループ単位での調査・発表といったアクティブラーニングに発展させていくためのトリガーとして本動画や活用本は有効です。

各教科や教科外で何度でも、繰り返し見せることができるのがこの動画の良さです。また、活用本は材料ですから応用も自在です。柔軟にカスタマイズできるところも魅力です。

４－３－２．新動画に対する評価（丹羽登氏）

動画①（モデル：伊藤さん）評価（丹羽登氏）

日本代表の未来を背負う１６歳

【ポイント】

- パラアイスホッケー選手：交通事故で車椅子での生活になった
- アイスホッケーの経験とパラアイスホッケーの違いに、最初は戸惑った
- スケーティングでの最初の第一歩は難しいが、重要である
- アイスホッケーと同様に、体をぶつけ合う競技なので、激しい
- 初めてやることは難しいけど、やってみたら可能性が広がる
- パラリンピックに出ることが目標、競技者を増やしたい
- 面倒だけど、工夫をすれば自分で出来る
- 少々の階段であれば車椅子で降りたり、昇ったりすることもある
- 恵まれた環境で育ったと思っている

【感　想】

パラアイスホッケーという激しいスポーツを行っているということは凄いなと思いますが、それだけでなく車椅子での生活は面倒なだけで工夫すれば、なんとかなると語っていたのがとても印象的でした。

全てのことを一人でするということではなく、例えば段差が高い階段を上るなど一人で出来ないことは、周囲の人に依頼しますが、階段を降りる時などは車椅子で降りられるので依頼せずに一人で降りていました。このように自分で工夫して出来ることは自分でしたいと思っている人は多いです。

以前、車椅子で生活する生徒と一緒に買い物に出かけた際に、階上の店まで車椅子を降りて手だけで階段を上っていました。どうして車椅子から降りて階段を上ったのかと聞きますと、「欲しいものがある時は、どんなことをしても買いたいからね」と言われました。自分で出来ることは自分でしたいということなのでしょう。少々危ないことでもやってみたいという大人とは少し違う感覚なのかもしれません。

やりたいことがあれば、工夫してチャレンジする。この姿勢が重要なのでしょうね。

【活用案】・・・例えば下記のような問いかけや検討をしてはどうか。

① 子どもたちに事故や病気で、体を動かすのを制限されたことがあるかどうか
→いるようであれば、その時の状況と感想を聞く

② 子どもにスポーツをする理由やスポーツを継続することの難しさを聞く

③ 最初は難しいが、やってみたら、なれて楽しくなったという体験を聞く

④ 「車椅子での生活は面倒だけど、工夫すれば大丈夫」ということの意味を考えさせる
親に頼りっぱなしになっていないか。自分の事は自分で出来ているか自己確認をさせる

動画②（モデル：木島さん）評価（丹羽登氏）

空 飛 ぶ 車 イ ス

【ポイント】

- 175 カ国を見て回った経験を生かして、訪日外国人への旅行情報の発信と提供をしている
- 車椅子生活になっただけで、かわいそうと思われるのが辛かった、ショックだった
- アメリカでの生活では不自由を感じなかったが、日本ではそうではない
- 車椅子生活になってよかったのは、親切な人と出会えるようになったこと
- 面白いことがあったので、次も新しいことをして楽しみたいと思うようになった
- 失敗を恐れないこと（失敗しないと良いことが分からない）
- みんなが過ごしやすい社会とは、笑顔のある社会
- 制約だらけの社会はよくない

【感　想】

車椅子での生活になってから、良かったと思うこととして、「親切な人と出会えるようになった」ことだと言われているのが、とても印象的でした。動画の最初の方で、「車椅子生活になっただけで、「かわいそう」と思われたり、言われたりしたのがショックだと言っていましたので、「かわいそう」という同情や哀れみの視点と、「親切にする」という視点との違いを考えるには、良い例だと思いました。

大学の講義などで、「交通事故や病気で、車椅子での生活になったら、周囲の友達や知り合いに、どうしてほしいですか」と聞きますと、「配慮や支援が必要」という回答が多く、「同情はしてほしくない」と回答する学生も多くいます。この「配慮や支援は必要だが、同情はいらない」というのは、かつて有名になった「同情するなら金をくれ」というテレビドラマ「家なき子」での名セリフを思い出します。

自分は安全な所にいて、他の人に救いの手を差し出すという行為は、決して悪いことではありません。全く対応しない人やからかう人に比べますと、はるかに前向きに考えてくれています。しかし、それだけでは自己満足でしかありません。交通事故の被害者になったり、病気に罹ったりした時は、「かわいそう」と思うことは自然なことかもしれません。しかし、自分の状態と向き合って、前向きに生活する人にとっては、「かわいそう」と思われることがイヤだということを理解した上で、必要とする配慮や支援を心掛けることが重要です。

【提案】・・・例えば下記のような問いかけや検討をしてはどうか。

① 子どもたちから、行ってみたい国を聞く。行きたい国はいくつの国かを聞く。
　→木島さんが 175 カ国行ったとのことですが、この数は凄いと子どもたちは実感出来るか

② 失敗を恐れず、様々な国へ出かけるというチャレンジをしてきたことに気づかせる

③ 日本では様々な制約があるため、チャレンジしにくいことに気づかせる

④ 親切と同情の違いについて、考えさせる

⑤ 必要とされる配慮について考えさせる

動画③（モデル：阪根さん）評価（丹羽登氏）

次々に夢を叶える全力ウーマン

【ポイント】

- 車椅子バスケット：2004 年アテネ・パラリンピック　日本代表
- 18 歳の時に、脊髄炎の後遺症で車椅子生活になった
- 汗をかくこと、スポーツが苦手だったが、車椅子バスケットをするようになった
- 笑顔を取り戻したいと思いながら、車椅子バスケットをやってきた
- アテネ大会出場という夢を叶えてから、私生活で自信を持つようになった
  結婚・出産もした、子どもを産む時に現役を引退した
- 車椅子でも、様々なことが出来ると言うのを発信したい
- 外へ出ると、バリアフリーなものが、バリアフリーとして使われていない
- 一人一人がバリアフリーとは何かを考えてほしい
- パラスポーツを通じて、手伝いたいという子どもが増えてほしい
- 外に出たときに声をかけてくれるのは有り難い、ちょっとした声かけは温かさを感じる
  障がいの有無にかかわらず、声を掛け合える社会になったらいい

【感　想】

パラリンピックに代表されるパラスポーツは、人の可能性を感じさせてくれます。パラスポーツをとおして、個々の人が活躍できる領域を探し出して、生き生きとした生活が出来るようにしてほしいですね。

バリアフリー化やユニバーサルデザイン化は、導入時には様々な人の使用を視野に入れて考えられるのですが、使用頻度が低いと別の用途に転用されたり、関係のない人が使用したりするため、本来それらの施設・設備を必要とする人が使用できない事があります。阪根さんは、そのことを、バリアフリーなものが、バリアフリーとして使用されていないと表現されていました。阪根さんの指摘以外にも、点字ブロック上に荷物や自転車等が置かれていて使用できない状態になっているなど、多くの人が気づかないうちに、使用できない状態にしていないか定期的に点検や見直しをすることが必要だと改めて思いました。

そのためには、様々な理由で通常の施設・設備を使用することが困難な人が、普段から使用できる環境にすることが重要です。例えば「障がい者用トイレ」と言われていたものが、「多機能トイレ」と変わり、今では「バリアフリートイレ」と呼び方が変わってきています。なにが「障がい」なのかという課題がある中で、障がいではないが困っているという人は多くいます。そのような人が使いやすい環境とは何かを考えて、整備していく必要性を感じます。

バリアフリーとは、障がいのある人だけを対象としているものではありません。高齢者や病気の人、疲れている人など、必要とする人が使えるようにすることで、多くの人の理解も広がります。駅などでのエレベータの設置は代表的なものです。狭い空間でも設置できるものが増え、入り口と出口が階や場所によって違うものも多くなりました。

阪根さんが最後に述べたように、障がいの有無に関わらず、互いに声を掛け合える社会、必要な場合に使用できる環境を整えることが重要なのだと思います。

【提案】・・・例えば下記のような問いかけや検討をしてはどうか。

① 運動やスポーツは苦手だけで、やってみたい・体験してみたい、応援してみたいという人はどれくらいいるのか聞く（プロスポーツの様に観ることも楽しみ方の一つ）

② 病気の後遺症で体が上手く動かせなくなることがあることを知る。
パラスポーツの選手には、交通事故等で手足を喪失・欠損したり、上手く動かす事が出来なくなったりするが、病気でも同様の状態になることがある。

③ 電車やバスなどの公共交通機関に乗ったことがあるかを聞く。
駅構内（トイレや改札、階段、ホーム等）で多くの人にとって便利になっている所を探す。

④ コンビニで品物を買う時に、高いところに置かれている品物をどうやって取るか聞く。
背の低い人（子どもも含む）や車椅子で生活している人は、高い場所にある品物を見る、手にすることが出来ない。百貨店やスーパーなどでは、低い場所に展示するよう心掛けている所もあるが、狭い空間を有効活用するために、一部のコンビニやスーパーでは高所まで商品を展示している所が目立つようになってきている。

⑤ 店や会社が効率的なものを追求することが多いが、どうすれば多くの人にとって使いやすい環境を作り・維持することが出来るのか考えさせる。

動画④（モデル：諸隈さん）評価（丹羽登氏）

子どもたちに“自由”を伝える講師

【ポイント】

- 24 歳のときに交通事故で片足を失った。車椅子バスケット選手として活躍中
- 現在はパラキャンの特別講師として各地の学校で子どもを対象に話をしている
- 足を失う前は自分で生活上の制限をかけていて不自由だったが、今は自由
  例えば、以前は大阪以外の友達は要らないと決めていたが、各地を回る中で友達が増えた
- 車椅子生活になって、困った時には助けてと言える様になった。心の自由を感じる
- 何が不自由と聞かれる事があるが、人に伝えることが出来るので不自由はない
- 困る事としては、車椅子用の駐車スペースに関係のない人が停めることをやめてほしい
- 車椅子の生活で困ることはない
  事故後は走れないのは当たり前の事なので、当たり前の事は不自由とは思っていない
- 不便だが不自由ではない
  足が不自由なので困らないかと聞かれることがあるが、不便だが不自由は感じない
- 社会には様々な人がいることを知り、興味を持ち、理解し、考え、行動を起こしてほしい
  そのようなことを繰り返す中で、みんなが過ごしやすい社会が出来る
- 一人でいる友達がいれば声をかける、いじめを受けている友達がいれば一緒に考える、そのように一緒に考えることで、よい社会が出来ていく

【感　想】

車椅子バスケットの選手ということなので、車椅子バスケットの話が中心なのかなと思ったのですが、パラスポーツのことではなく、人との繋がりを重視した話でした。

必要な時には、周囲の人に助けてと依頼すれば良いので不自由は感じないという話は、多くの人から聞く事があります。「不便」と「不自由」を混在して使用することがあるので、この点は重要ですね。例えば、数キロ先の人を認識出来る視力の人から見ると、私のような近視は「不自由」だと思うかもしれません。しかし、砂漠や草原、ジャングルなどでの生活ではありません。街中での生活ですので、「不便」だけど「不自由」ではありません。

視力や聴力、運動力、感受性、記憶力、自制制御力（自制心）などの個々の能力や特性は、様々です。また、それらの能力や特性は、ハード面とソフト面の両方の環境が整備されれば、日常生活では困らなくなることも多々あります。言い換えるならば、運動機能の障がいや知的機能の障がい、感覚機能の障がい、情緒機能の障がいなど、様々な機能障がいがあっても、その人に適した環境が整備されれば、「不便」だけど「不自由」ではない社会を作ることが出来るということです。そのことを諸隅さんは伝えてくれているのだと思います。

教育や福祉の分野でも、近年は「自立」が話題になることが多くなりました。これらの分野で使われる自立は、国語辞典などにある様な、「一人で生きる」とか「支えがなくても立つ」というような意味だけではありません。社会的自立、職業的自立など様々な使われ方をしますが、機器やツール、制度、周囲の人などを状況に応じて適宜活用して自己実現を図るというような意味で捉える方が適切です。電動車椅子や福祉タクシー、駅のエレベータ、駅構内の点字ブロックなどは、自転車やタクシー、駅のエレベータや階段、駅構内の案内表示を利用するのと同じで、

様々な人が公共交通機関を利用するために必要な物的な（ハード面の）環境です。

しかし、ハード面の整備だけでは、上手く生活できない事があります。そのような場合に、当事者は周囲の人に依頼できるようになってほしいですし、周囲の人は依頼があったときはスムーズに助けてほしいなと思います。

このようなソフト面については、日頃から心掛ける、又は困っていることが分からないと、タイムリーに動くことが出来ません。そのため、社会には多様な人がいることを理解し、互いに助け合える状況を作っていきたいものですね。

【提案】・・・例えば下記のような問いかけや検討をしてはどうか。

① キャンプブームですが、一人で人のいない山の中にあなたはどのぐらいいられるでしょうか。
私達は、人が近くにいるだけで安心できるのです。
諸隅さんは多くの人と友達になり話をすることで、心の自由を感じたと言っています。人と話をする場、人との繋がりを持つ場を作るのは、障がいの有無に関わらず重要です。

② 家で、自分の茶碗や箸、布団などが決まっている人はいますか。
自分の布団などを別の人が勝手に使ったら、どう思いますか。イヤですよね。バリアフリートイレなども同様で、そのようなスペースがないと困る人を対象に作られたものですので、対象外の人が自由に使って良いというものではありません。必要とする人が使用できるようにしておく必要があります。
バリアフリートイレは障がいのある人の使用に支障がなければ使用することは可能です。しかし障がい者等用駐車スペースは対象が限定されているので勝手に駐車してはいけません。

③ 多様な人とは、どのような人のことですか。
バリアフリートイレも障がい者等用駐車スペースも、運動機能の障がいがある人だけを対象としたものではありません。ですので、自分専用の茶碗や布団とは違いますが、どのような人（家族）が使用できるのかを考えるのは、とても重要なことです。
子どもと一緒に考える中で、多様な人がいることを理解し、必要な環境を整えることの必要性に気づくようにすることが大切です。一般的には「肢体不自由者」「脳原性の運動機能障がい者」「内部障がい者(心臓機能障がい者等)」「視覚障がい者」「要介護の高齢者」などが対象になります。心臓機能障がいの人は歩くことが出来るので、どうして障がい者等用駐車スペースに車を停めるのか疑問に思う人もいますが、長い距離を歩くことが難しいため、状況によっては酸素ボンベや車椅子が必要になることがあります。また、弱視の人の中には日中は白杖等は必要ではありませんが、夜間や地下街に入ると白杖が必要になる人もいます。
このように多様な人がいることを理解する必要がありますが、外見からだけでは配慮や支援が必要かどうかが分かりません。その際に「ヘルプマーク」「ハート・プラスマーク」「オストメイトマーク」などを鞄などにつけているかどうか、「パーキング・パーミット制度の利用証」を所持しているかなど、障がい者等用駐車スペースを使用できる人を判断する際の参考にしてほしいと思います。

動画⑤（何が問題）評価（丹羽登氏）

何が問題

【ポイント】

- 障がい者等用駐車スペースの利用者と広いスペースの必要性
- 障がい者以外が使用するので、スペースにコーンを置いて、使用時は連絡するように求めたが、利用者は車を一度降りて連絡するのに手間がかかるため使用しなくなっていった
- せっかく障がい者等用駐車スペースがあるのに、依頼しないと利用できない
- 電車利用時も電車とホーム間など危険な場所があるので、駅員に依頼する必要がある
- また、乗車時の準備や安全確保のため、数本後の電車しか利用できないこともある
- 駅員の手伝いが必要なので、他の人よりも時間がかかる
- 電車とホームの段差や隙間がなくなると、駅員が居なくても乗車可能
- 多様な人が使用するのを計画段階から目指して作る必要がある（ユニバーサルデザイン）
- 身の回りのユニバーサルデザインを探してみよう
- 自動販売機のユニバーサルデザインを例に挙げ、周りの環境（設備や機器など）が、どう変われば生活しやすくなるか考えてみよう

【感　想】

障がい者等用駐車スペースの使用については、必要とする人が使用することが難しくなっている状況を理解する必要があります。障がいのない人の視点からは、必要であれば連絡すれば良いと思うかもしれませんが、結構面倒なことです。また、なぜ障がいのある人だけが、そのような連絡をしなければならないのかを考える必要があります。

これは、電車に乗るときも同様です。以前に比べるとバリアフリー化が進み、車椅子でも乗車が出来るようになりましたが、エレベータ等の設置がない時は、駅員や周囲の人に頼んで、階段を乗降しなければなりませんでした。特に電動車椅子は重いので、６人で下ろすこともあり、手伝う人の身体への負担や安全性という面からも課題がありました。 現在は、かなり解消されましたが、それでも駅員への依頼が必要なことがあります。このような「不便」を解消するためには、施設・設備・機器等の設計の段階から、多くの人が使用することを考慮に入れる「ユニバーサルデザイン」の考え方が必要になります。動画にあるハード面でのユニバーサルデザイン化だけでなく、制度や考え方、捉え方などのソフト面でのユニバーサルデザイン化について、多くの人が意識するようになってほしいですね。

【活用案】・・・例えば下記のような問いかけや検討をしてはどうか。

① 自分の席に、別の人が勝手に座っていた時に、どのように声をかけますか
勝手に使用するのではなく、気がついたら一言「使わせて」などの声かけが必要ですね

② 車椅子の人が電車での移動が多くなりましたが、まだ課題があると知っていましたか
なぜ駅員に依頼しないと乗れないのかという疑問に気づくようにすることが大切です。

③ 身の回りにはユニバーサルデザインによるものが多くあります。しかし上手く活用されていないことがあります。スマートフォンやタブレットなどは、ユニバーサルデザインの代表的なものです。どのような点がユニバーサルデザインなのか、見つけてみましょう。

新動画に対する評価（西巻悦子氏）

動画①（モデル：伊藤さん）評価（西巻悦子氏）

日本代表の未来を背負う１６歳

伊藤さんのサブタイトル「人生をどれだけ謳歌できるか」をどう受け止められたでしょうか。私は心底、驚きました。そして納得できたのです。そこで私のお薦めポイントを 3 点あげます。カリキュラム上の総合学習・高校生にとっては探究的な学習で、自分たちで課題を見つけるとしたらパラリンピックの最中です（2022.3.2 現在）し、文字通りスポーツに関連した課題を探し解決してゆく過程で活用したいと思う動画とテキストです。

一つ目は、彼には困難や脅威に直面した時に、適応できる能力を意味するレジリエンスの力が備わっていることに気づいてもらいたいことです。これは、学びを研究にまで高める時に必要な力です。総合的な学習や探究学習で求められるのは、自分で課題を探し、深めてゆく根気です。挫けない心です。どんなにちっぽけに思えようと、どんなに壮大で困難な課題に思えようとも、それを見つけたのは自分だから、そこに誇りをもって続けていってほしいと思っています。ですから、彼が交通事故に遭ったこと、歩行機能を失ったことは事実です。事実は事実として受け止め、そこにはとどまっていないのです。

しかも、その事実から次の一歩を踏み出すまでに迷いがないのです。車椅子で階段を上り下りする時でさえ、面倒と言いながらも、ごく当たり前のようにふるまい、もしも足が不自由でなかったならなどとは言っていないのです。何かに興味を持って学ぼうとすれば、探究しようとすれば困難はつきものです。困難を喜びに変えるのに、伊藤さんはとんでもない努力が必要だとは言っていません。心の整理に半年かかったと言っておられるが事実は事実として受け止め誘われるままにパラスポーツに入っていったと述懐しています、なんというレジリエンス力（りょく）でしょう。感応や共感というこころの働きが鋭敏な時期にこそ、繰り返し見てもらって取り込んでいってほしいと思います。

二つ目はパラアイスホッケーの最初の関門はスケーティングにあると言って説明しているところがお薦めです。なぜなら、競技内容も知らないことが多く、道具についても多くを知っている人は少ないでしょう。これらの道具があって成り立つスポーツであり、道具を作る過程、競技できる環境、人的支援等、物事が成り立つためにどのような要因があるか、素材を提供してくれています。

最後に日常に面倒とは思うが階段を自力で上り下りしてしまうなどという独立心・自立心に是非、触れていただくことをお薦めします。「人生を謳歌したい」という彼の言葉は人間賛歌に満ちています。目標をもって歩む素晴らしさが誰の心にも自然な形で入ってくると確信しています。

動画②（モデル：木島さん）評価（西巻悦子氏）

空 飛 ぶ 車 イ ス

木島さんの積極的な生き方が伝わってきて素晴らしいです。障がいを負っている人という気の毒な方などという偏見をこの動画視聴直後に取り払われてしまいます。

第一に企業人としての生き方が素晴らしいです。キャリア教育でまず問われるのは、自分自身の生き方です。将来を見据えたつもりで自分をどこか既存の職業なり、職種や職場なりにあてはめて考えてしまいがちです。ではなく、自分の人生という大きな視点で考え、仕事を創出していることです。何もないところからではありません。TV 番組をきっかけに世界のいろいろなところを旅し、ご自分の経験から、障がいを持った人たちが旅を存分に楽しめるようにというお仕事を作り出されておられます。その時に、ご自分の不自由をマイナスととらえるのではなく、そうした経験も土台にして、まさに傍を楽にするという“働く“を具体化しておられます。

第二に深く自己認識について考えさせてくださる素材を提供してくださっています。小学校・中学校・高等学校では社会性を養い、自己認識を深める訓練に特化した科目はありません。しかし、現代を生きる我々にとってまた、次代を担う学童期・中学・高校期の子どもの質にとって自己認識をしっかり持つよう訓練しておくことがどれほど重要か、私がここに書くまでもありませんが敢えてこのことを強調します。

自己認識は認知トレーニングの中（宮口幸治『ケーキの切れない非行少年たち』新潮社，2019.）でも強調されている点です。木島さん自身が、動画の中で言っておられるように世間は、車いすに乗っておられる方というだけで「かわいそうとか、できない人」という目で見てしまうのです。それが偏見であることは知識としてわかっていても、偏見をなくそうと思っていても、そういう目で見てしまいがちです。そのことを指摘してくれています。

認知を知識から知恵へと深めていれば、自分のバイアスを意識し、他者に向ける目を自分のフィルターだけで見てはならないということに気づくでしょう。

先生方がクラス担任としてＬＨＲやＳＨＲで繰り返し見せ、関連図書を学校図書館と連携して薦めるなどしてごらんになったらいかがでしょう。感想は言いたくなったら書いてもらうのです。人の心の成長は言葉だけにあらわれるわけではありません。ですから、お話を子どもたちに読んでやると同じように見せておくだけで充分です。ふとしたしぐさや、振る舞いに自制心と寛容さが表れてくることは請け合いです。

第三に木島さんの明るさです。人はその声や服装で人を判断してしまいがちです。品格ある成人としてお洒落でスマートな自動車運転をされています。障がいのあるなしにかかわらず大人のロールモデルとして、見て知ってほしい点です。

ワークシートに書く質問は自分自身への問いかけと考えて書くよう指導すると効果的です。気づきや感想は言語化できない場合もあるので、これから調べたいことを箇条書きにメモしておくなどもお薦めです。時がたって内面化すると表に出てくるはずです。

動画③（モデル：阪根さん）評価（西巻悦子氏）

次々に夢を叶える全力ウーマン

何より坂根さんは正直に障がいを負った体験を語ってくれています。「これからどう生きていったらいいのか思いつかなくって」と語っておられるが、どれほどの思いが込められた言葉でしょうか。過酷な病から抜け出した喜びよりも辛さがまさっただろうと思います。しかし、坂根さんは車椅子バスケットで競技者としてだけでなく生活者としてとしても見事な生き方を見せてくださってます。

第一に活動的でいらっしゃるところが素敵です。アテネパラリンピック日本代表だった実績は勿論、実績をバネに社会的に意義ある活動を結婚・出産後にも続けておられます。

これは小・中・高すべての校種で福祉について学ぶときに是非、見せたい動画だと思います。

第二に阪根さんの考え方と意見が見どころです。現代では社会的弱者に変化を求めるのではなく、社会のあり方そのものを変えることで、社会的弱者が生きがいを見つけ、役割を担っていける社会をつくりあげるというノーマライゼーションの考え方が社会福祉の基本にあるのですが、阪根さんはその考えを自らの言葉でわかりやすく語り、具体的な場面でどういうことかを見せてくれています。しかし、まだまだ現実はノーマライゼーションの環境には遠く、不十分なところが多いのですが、一人一人が考えてゆくことが大切と方向性を示してくれています。

第三に素晴らしいのが、共生社会の概念を「誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会」（文部科学省）でといった堅苦しい物言いではなく、ちょっとのことでも声を掛け合える、困ってたら助けようとするという意識を持ちましょうと、日常の暮らしの中から説いてくださっているところです。

阪根さんは、パラスポーツの普及活動にも積極的に携わっておられますが、その根幹にノーマライゼーション、バリアフリー、共生社会といったあるべき社会の方向性を据えておられます。

ワークシート C を使い、児童生徒が今後の生き方を考えるときに知っておくべきことを調べさせ、自分の言葉でまとめるように指導するとより深い学びになります。

調べるためのキーワードは阪根さんの発言にありますので、まずそこから取るように仕向けると傾聴という学びの基盤となる態度を育成することにもなり効果的です。

なお、阪根さんが、パラスポーツでパラリンピック出場を果たし、その後、結婚・出産を経て今のパラスポーツの普及という活動に邁進しておられます。ジェンダーフリーの視点からも、阪根さんをこれからの女性の在り方の一つのロールモデルとして、考えてみることも可能です。

動画④（モデル：諸隈さん）評価（西巻悦子氏）

子どもたちに“自由”を伝える講師

なんて素晴らしい言葉と笑顔なんでしょう。

パラキャンの理念を体現してくれている方と言っても過言ではありません。生き生きとした精神と活動の勢いが感じられます。言葉の使い分けも巧みでストンと胸に落ちるように仕掛けられています。小学生から高校生まで学級担任が LHR で活用なさることをお勧めします。なぜなら、喫緊の課題であるイジメの根幹にまで触れておられるからです。

まず、1 点目は交通事故で足を失ってからの方が自分の心が自由に動くようになったと言っておられる点です。車いすになったということをマイナスととらえておられない。そこまでには苦難があったことは容易に推測されますが、そのようなバイアスを通して見てしまう視聴者側の潜在意識を、すぐに振り払ってくれる表情であり、言葉なのです。他者との壁を作らないで、対等な関係性を醸し出して、視聴者の心に橋を架けてくれています。映像に映し出されている幼い人たちも車いすであることも注目です。諸隈マジックにかかったように、自然に他者とのコミュニケーションの基本が笑顔であることに気づかされます。

2 点目は、困ったことがあったら助けてと言い、助けてもらったらありがとうと言うという社会生活の基本をさらりと言っておられる点です。目に見える障がいもあれば、見えない障がいもあります。他者に気づかれず、また、当事者にその意識がない場合もあります。他者との交流が苦手な障がいの場合でも、ありがとうは鉄板です。学校教育のカリキュラムでは取り立てて対人スキル（人とのコミュニケーションのとり方や作法など）を教える科目はありません。学級会や LHR の時間に、担任の先生が、繰り返しこの動画を見せて、何事も「練習」と諸隈さんが言っておられるように、「嫌なことはやめてと言う」「困ったことは助けてと言う」、「助けてもらったら有難うと言う」ということを繰り返し、練習させることをお勧めします。それによって、言葉と態度が整えられ、社会生活の基本が自然に体得できるでしょう。

3 点目は、キャリア教育で使うと効果的な発言が諸隈さんの動画にはたくさんあるということです。諸隈さんは、自分に制限をかけてしまう人は不自由な人であるが、自分は心が自由に動くようになったので不便なことはあるが不自由ではないと言っておられます。色々な選択があることを気づいてほしいというメッセージを発信しています。将来の計画や希望を俄かには立てられない場合もありますが、色々な選択があるということ、選ぶのは自分であること、心を自由にして世界を見てみると、自ずと自分を見つめることになります。

キャリア教育では自己認識が指導の第一歩になります。できないとか無理とか最初から制限をかけず自由な心で将来の進路選択をするために適切な言葉がちりばめられています。

学級活動、LHR、キャリア教育等で、動画視聴後に、ワークシート C を使い、社会生活上の対人スキルの学習や進路選択のための自己認識の把握と気づきのために、諸隈さんの動画を活用することをお勧めします。

動画⑤（何が問題）評価（西巻悦子氏）

何が問題

この動画は、すべての人の人権を基軸としたノーマライゼーション社会・共生社会の実現のために啓蒙するための動画として最適です。

情報を正しく読み取ることができるかが第一歩で、駐車場の問題にしても、公共交通機関の乗降の問題にしても、多くの人は必要としている人を想像することができず、だれもがそうなるかもしれないという当事者意識から遠くなってしまっているのが、このような事態を作り出してしまいます。

この動画は、想像する訓練、解決策を考える訓練になります。近年、ハンディキャップ（社会的不利）環境がバリアフリーという理念で整備されてきているのですが、私たちの意識がハンディキャップに無頓着であっては、ノーマライゼーション社会・共生社会の実現から遠くなってしまうことを気づかせてくれます。

皆が平等に暮らしやすくなるためには、多様な人たちの立場に立った視点を持つことが肝要です。そのためにワークシート B を使って、最初の質問で、自分が①から⑤の立場だとしたら、どういうことに困るかを考えてもらうと、ノーマライゼーション社会・共生社会の理念を意識化するのに効果的です。次の質問では、①から⑤の人にあなたはどんな声掛けをするか自由に書いてみると、意外に見ているようで見ていないという想像力の不足に気づくでしょう。そこが起点となって自分のバイアス（先入観や偏見）と向き合い、自己認識を深めることになるでしょう。

４－３－3．旧動画に対する評価（西巻悦子氏）

５本の動画は、出演者の魅力に支えられてとても見ごたえのあるものとなっていると存じます。 ただし、それだけでは特定非営利活動法人パラキャン（以後、パラキャンと略称します。）がこの DVD に託して伝えたいことが明確にならず、メッセージが曖昧なアンソロジーになってしまいます。学校現場での活用を進めるには、一貫したテーマと明確なメッセージ、具体的な提案と近未来への展望を盛りこむ必要があると考えます。

そこで以下のように改善点を整理させていただき、それぞれに説明します。

- 学校現場での活用を考えるなら学校教育の枠組みの整理
- テーマおよびメッセージの明確化
- 具体的な提案と近未来への展望

まず、学校現場での活用を考えるなら学校教育の枠組みの整理をする必要についてです。日本の学校教育には、言うまでもなく学習指導要領というナショナルスタンダードがあり、学習指導要領を遵守しなければなりません。縛られていると感じておられる先生方はいらっしゃらないはずで、むしろ、あるべき方向性が示されているとお考えだということです。ただし、学習指導要領には、具体的に指導案が書かれているわけではないので、実践にあたってはそれぞれの先生方の創意工夫が必要です。特に教科書が指定されているわけではない新設された教科である「道徳」や、「総合的な学習」では、学習指導要領が目指すところは理解できても教科として教材選択に、先生方のご苦労が多い分野でもあり遣り甲斐のあるところでもあります。そこで、学習指導要領が高等学校まで 2022 年で新しくなるのですから、新学習指導要領が目指しているポイントをふまえた教材の提供と意識することが重要です。

次にテーマおよびメッセージを明確にし、繰り返す必要があります。共生社会（ノーマライゼーション）やジェンダーフリー、キャリア形成等、パラキャンが目指している理想と各動画の出演者が語るメッセージとが響き合う必要があります。各出演者がそれぞれの立場から発信するメッセージはパラキャン全体のメッセージに収束してゆくようにすると、明確なメッセージが繰り返し語られることになります。語られた事柄は長期記憶となり、学習者の行動変容を促すからです。

最後に、具体的に提案と近未来への展望を盛りこむ必要があると考えます。動画では社会課題を理解するという理念が謳われていますが、具体的にどのようなことなのかをそれぞれの言葉で具体的な提案を訴えるようになさるとより視聴者に理解されると思います。同時に、視聴者が当事者意識を持ちやすくなるようにあるべき近未来像をそれぞれが語る必要があると考えます。

以上、3 点についてご検討ください。

５．　授業実施後アンケート

５－１．アンケート調査の概要

以下の全国６つの小学校（１１クラス）において、生徒２６０名、教員１４名に対して、ビデオ教材を使った学習を行い、その効果などを評価するためのアンケートを実施した。

生徒に対するアンケートは、ビデオ教材を使った学習前後で、障がい者に対するイメージがどのように変容したかを把握する事を目的としており、教員に対するアンケートは、教材の使いやすさ、学習効果などを把握することを目的としている。
次項より、アンケート結果を示す。
なお、動画は、４章で示した有識者のアドバイスを受けて途中で改良しているため、改良前の動画を旧動画（または旧ビデオ）、改良後の動画を新動画（または新ビデオ）と表記し、それぞれについて分析を行った。

旧ビデオ素材学習　アンケートの実施概要

学校名	学年・クラス	生徒数	教員人数	生徒への アンケート	教師への アンケート
小平第一小学校	５年１組	35 名	１名	○	○
小平第一小学校	５年２組	33 名	―	○	×
武蔵野第一小学校	３年１組	24 名	１名	○	○
武蔵野第一小学校	３年２組	26 名	１名	○	○
武蔵野第一小学校	３年３組	27 名	１名	○	○
中央市立田富小学校	４年生	30 名	２名	○	○
葛飾区立亀青小学校	６年生	―	３名	×	○
斑鳩町立斑鳩東小学校	６年生	―	２名	×	○
合計		１７５名	11 名		

新ビデオ素材学習　アンケートの実施概要

学校名	学年・クラス	生徒数	教員人数	生徒への アンケート	教師への アンケート
南高安小学校	６年１組	３０名	１名	○	○
南高安小学校	６年２組	２８名	１名	○	○
南高安小学校	６年３組	２７名	１名	○	○
合計		85 名	３名		

５－２．アンケート結果

５－２－１．旧動画に対するアンケート結果

５つの小学校、生徒１７５名、教員１１名に対して、旧動画を用いた授業を行い、アンケートを実施した。結果を以下に示す。

〈旧動画に対する小学生の回答〉

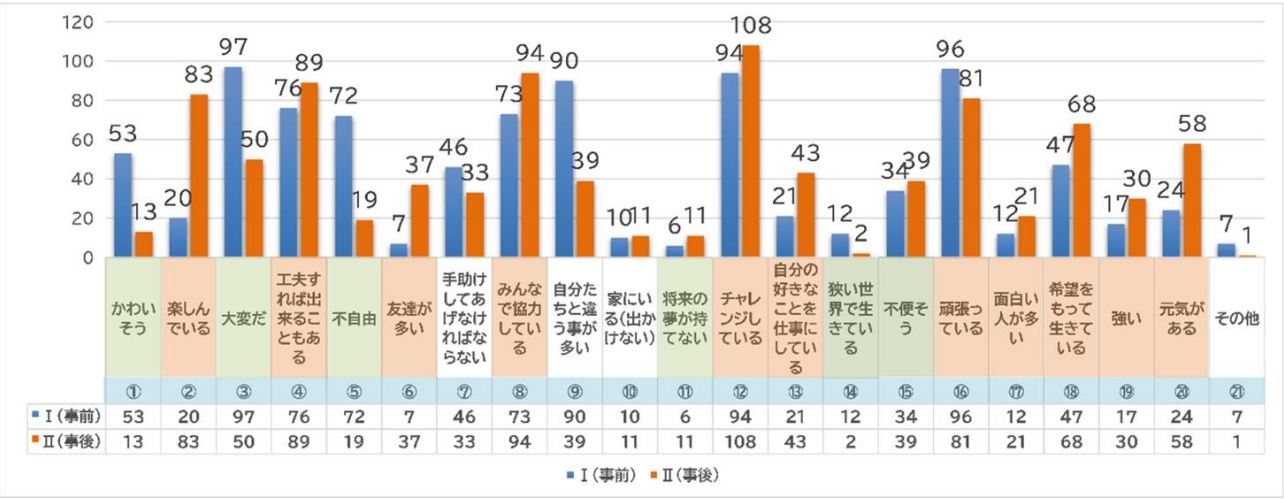
まず、生徒に対するアンケートで、ビデオ教材を使った学習前後で、障がい者に対するイメージがどのように変容したかを把握した。ビデオ教材を使った学習前後それぞれで、障がいのある人についてのイメージを表す２０ワードから５つ選んでもらった結果、まず、障がい者のイメージとして、「チャレンジしている」「工夫すればできることもある」「がんばっている」などが多く選択された。

ビデオ教材を使った学習前後で大きくイメージが変わっているものも多く見られた。特に、ビデオ学習前に多い、「かわいそう」「大変だ」「自分たちと違う事が多い」などのイメージは、実施後には大きく減少している。一方で、「楽しんでいる」「みんなで協力している」「希望をもって生きている」などのポジティブなイメージが、実施後に増加している事が分かる。

旧ビデオ素材・生徒の結果（全回答者合計）

Ⅰ.障がいのある人についてのイメージ(5つ選択)
障がいのある人のイメージについて、特にあてはまるもの５つに○をつけてください。

Ⅱ.旧ビデオ学習後の、障がいのある人のイメージ(5つ選択)
旧ビデオ学習を行ったあとの、障がいのある人についてのイメージについて、特にあてはまるもの５つに○をつけてください。



ポジティブなイメージ　ネガティブなイメージ　中立的なイメージ・その他

参加総数:175 名

〈旧動画に対する教員の回答〉

続いて、旧ビデオ教材を扱った教員の感想を見ると、「テキストの使いやすさ」「共生社会の理解」「生徒への伝え方の理解」「生徒の理解」など、総じて「やや評価する」以上の高い評価を得た。教員から見た生徒の理解度に関しても、総じて高い評価が得られているが、「ハードのバリアの理解」「どんな人にも可能性があること」など具体的なことがらについて非常に理解度が高いのに対し、「障がいが社会の側にあること」「多様性の理解」といった抽象的な概念についての理解が、やや低くなっている傾向が見られた。

教員の自由回答からも、障がいを持ちながら目標をもって生きている障がい者の姿などが評価され、障がい者のイメージを変える学習効果が指摘されている。一方で、小学生にとっては、「障がいが社会の側にあること」「多様性の理解」といった抽象的な概念の理解が、難しい事を指摘する意見が散見された。

旧ビデオ素材・教員の結果（全回答者平均）

Ⅰ. パラキャンの学習教材(ビデオ)を使った感想を伺います。あてはまる番号に○をつけてください。

1. 今回の学習の内容は共生社会教育として有効だと思いましたか？

	全く	やや	どちらでもない	やや	非常に	
そう思わない	1	2	3	4	5	そう思う
					4.73	

2. この学習を通じて児童／生徒に何を伝えたら良いか理解できましたか？

	全く	やや	どちらでもない	やや	非常に	
そう思わない	1	2	3	4	5	そう思う
					4.91	

3. 学習教材(ビデオ)の内容は児童／生徒が理解しやすいものでしたか？

	全く	やや	どちらでもない	やや	非常に	
そう思わない	1	2	3	4	5	そう思う
				4.55		

4. また パラキャンの授業を受講させたいですか？

	全く	やや	どちらでもない	やや	非常に	
そう思わない	1	2	3	4	5	そう思う
				4.64		

Ⅱ. 教材(旧ビデオ)を用いた学習を通じて児童／生徒が以下の内容についてどの程度理解したと感じましたか？

5. 障がいは本人以上に社会の側にあるということ(障がいの意味・理解)

	全く		やや		どちらでもない		やや		非常に		
そう思わない	1		2		3		4		5		そう思う
							4				

6. 色々な人がいることで社会が豊かになること(多様性の理解)

	全く		やや		どちらでもない		やや		非常に		
そう思わない	1		2		3		4		5		そう思う
							4				

7. 使いやすくする工夫で広がること(ハードの工夫)

	全く		やや		どちらでもない		やや		非常に		
そう思わない	1		2		3		4		5		そう思う
								4.36			

8. どんな人にも可能性があること(目標や夢)

	全く		やや		どちらでもない		やや		非常に		
そう思わない	1		2		3		4		5		そう思う
									4.82		

５－２－２．新動画に対するアンケート結果

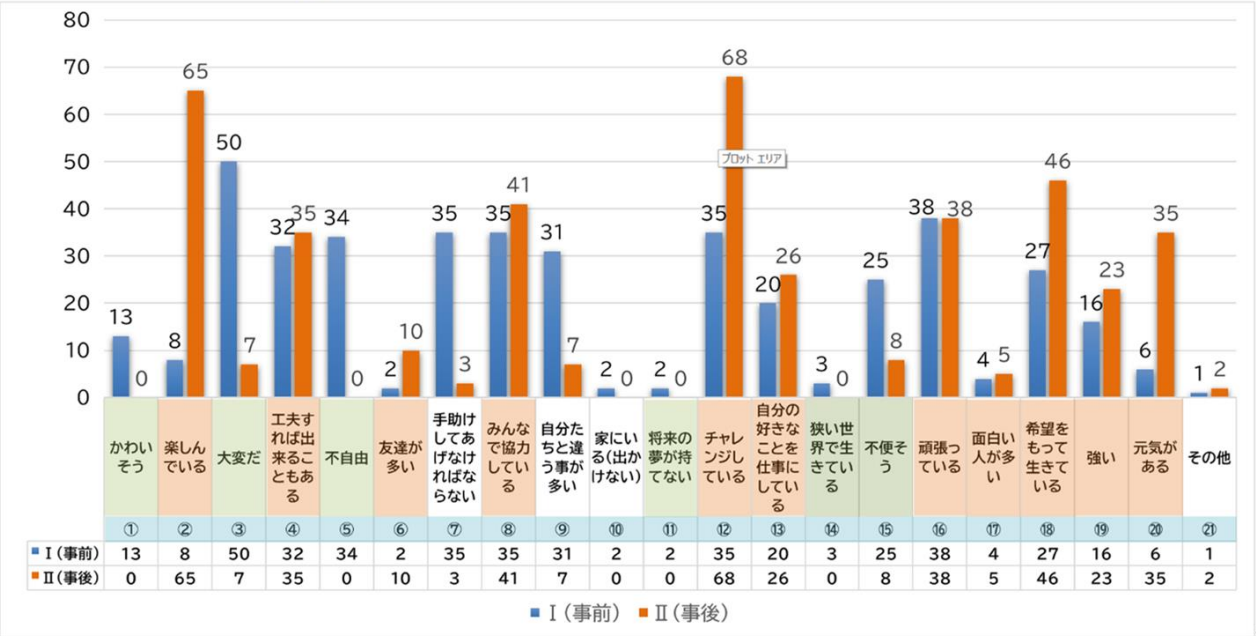
新動画を用いた授業については、１つの小学校（生徒 85 名、教員 3 名）に対して、アンケートを実施した。

〈新動画に対する生徒の回答〉

生徒に対するアンケートでは、ビデオ教材を使った学習前後で大きくイメージが変わっているものも多く見られた。特に、ビデオ学習前に多い、「大変だ」「手助けしてあげなければならない」「不便そう」などのネガティブなイメージと、「自分たちと違う事が多い」などのイメージは、実施後には大きく減少している。一方で、「楽しんでいる」「チャレンジしている」「希望をもって生きている」などのポジティブなイメージが、実施後に増加している事が分かる。

ネガティブなイメージがポジティブに変化する傾向は、旧ビデオに比べても、更に大きくなっていると考えられる。

新ビデオ学習を行ったあとの、障がいのある人についてのイメージいついて、特にあてはまるもの５つに○をつけてください。(1, 2, 3組合計)



	かわいそう	楽しんでいる	大変だ	工夫すれば出来ることもある	不自由	友達が多い	手助けしてあげなければならない	みんなで協力している	自分たちと違う事が多い	家にいる(出かけない)	将来の夢が持てない	チャレンジしている	自分の好きなことを仕事にしている	狭い世界で生きている	不便そう	頑張っている	面白い人が多い	希望をもって生きている	強い	元気がある	その他
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑
Ⅰ(事前)	13	8	50	32	34	2	35	35	31	2	2	35	20	3	25	38	4	27	16	6	1
Ⅱ(事後)	0	65	7	35	0	10	3	41	7	0	0	68	26	0	8	38	5	46	23	35	2

■Ⅰ(事前) ■Ⅱ(事後)

□ポジティブなイメージ □ネガティブなイメージ □中立的なイメージ・その他

〈新動画に対する教員の回答〉

続いて、新ビデオ教材を扱った教員の感想を見ると、「テキストの使いやすさ」「共生社会の理解」「生徒への伝え方の理解」「生徒の理解」など、総じて「やや評価する」以上の高い評価を得た。教員から見た生徒の理解度に関しても、総じて高い評価が得られているが、「ハードのバリアの理解」「どんな人にも可能性があること」など具体的なことがらについて非常に理解度が高いのに対し、「障がいが社会の側にあること」「多様性の理解」といった抽象的な概念についての理解が、やや低くなっている傾向が見られた。

教員の自由回答からも、障がいを持ちながら目標をもって生きている障がい者の姿などが評価され、障がい者のイメージを変える学習効果が指摘されている。一方で、小学生にとっては、「障がいが社会の側にあること」「多様性の理解」といった抽象的な概念の理解が、難しい事を指摘する意見が散見された。

その他に、課題を見つけるとすれば、「テキストの使いやすさ」の平均値が、「どちらでもない」に近い評価なっている。該当する事例が少ない中ではあるが、パラキャンスタッフが一緒に授業を行った学校は、「非常に使いやすい」と答えているのに比べ、一緒に授業を行わなかった学校での評価が少ないことは、今後の課題といえる。

Ⅰ. パラキャンの学習教材(ビデオ)を使った感想を伺います。あてはまる番号に○をつけてください。(1～3 組平均)

1. テキストは使いやすかったでしょうか？

	全く		やや		どちらでもない		やや		非常に		
そう思わない	1		2		3		4		5		そう思う
						3.67					

2. 今回の学習の内容は共生社会教育として有効だと思いましたか？

	全く		やや		どちらでもない		やや		非常に		
そう思わない	1		2		3		4		5		そう思う
								4.67			

3. この学習を通じて児童/生徒に何を伝えたら良いか理解できましたか？

	全く		やや		どちらでもない		やや		非常に		
そう思わない	1		2		3		4		5		そう思う
								4.67			

4. 学習教材(ビデオ)の内容は児童/生徒が理解しやすいものでしたか？

	全く		やや		どちらでもない		やや		非常に		
そう思わない	1		2		3		4		5		そう思う
									5.00		

5. 他の人の動画も見た方が、共生社会への理解が深まると思いますか？

	全く		やや		どちらでもない		やや		非常に	
そう思わない	1		2		3		4		5	そう思う
								4.33		

Ⅱ. 児童／生徒が以下の内容についてどの程度理解しましたか？あてはまる番号に〇をつけてください。

6. 障がいは本人以上に社会の側にあるということ（障がいの意味・理解）

	全く		やや		どちらでもない		やや		非常に	
そう思わない	1		2		3		4		5	そう思う
								4.33		

7. 色々な人がいることで社会が豊かになること（多様性）

	全く		やや		どちらでもない		やや		非常に	
そう思わない	1		2		3		4		5	そう思う
								4.33		

8. 使いやすくする工夫で可能性が広がること（ハードの工夫）

	全く		やや		どちらでもない		やや		非常に	
そう思わない	1		2		3		4		5	そう思う
								4.33		

9.どんな人にも可能性があること（目標や夢）

	全く		やや		どちらでもない		やや		非常に	
そう思わない	1		2		3		4		5	そう思う
								4.67		

Ⅲ. パラキャンの学習教材（ビデオ）に関する感想、ご意見をお聞かせください。（教員）

・2 本のビデオを視聴しましたが、どちらも児童に分かりやすい、伝わりやすい内容でした。児童の中に新たな気づき、発見が多くあったようで大変有意義な時間となりました。（6 年 2 組）

・それぞれの人たちがどんなことを大切にして生活を送っているのかがすごくわかりやすかったです。子ども達も色々なことを考えることができました。（6 年 3 組）

５－３．アンケート調査のまとめ

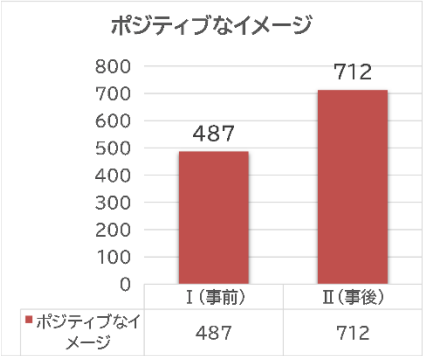
５－３－１．生徒アンケートのまとめ

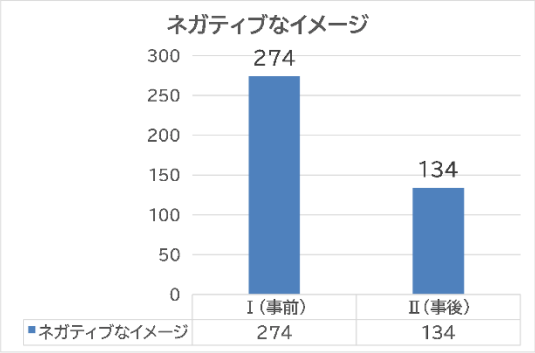
生徒アンケートの結果、障がいのある人に対するイメージについて、動画学習後にネガティブなイメージが減少し、ポジティブなイメージが増加していることが分かった。新旧ビデオを比較すると、新しいビデオに関して、よりこの傾向が強くみられ、ビデオの改良が、ポジティブな結果をもたらしていることを示している。

教員アンケートの結果を見ると、新旧ビデオともに、「テキストの使いやすさ」「共生社会の理解」「生徒への伝え方の理解」「生徒の理解」など、総じて「やや評価する」以上の高い評価を得た。教員から見た生徒の理解度に関しても、総じて高い評価が得られているが、小学生にとっては、「障がいが社会の側にあること」「多様性の理解」といった抽象的な概念の理解がやや難しいという事も分かった。また、今後の課題として、パラキャンスタッフが一緒に授業を行わなかった場合に、教員のテキストの理解をどうサポートするかがあげられる。

旧ビデオ学習後の、障がいのある人に対するポジティブなイメージ、ネガティブなイメージの変化

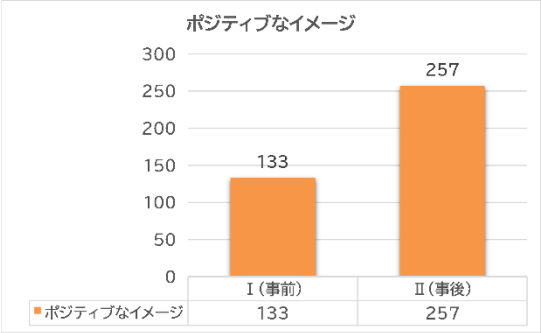
	Ⅰ（事前）	Ⅱ（事後）
ポジティブなイメージ	487	712
ネガティブなイメージ	274	134

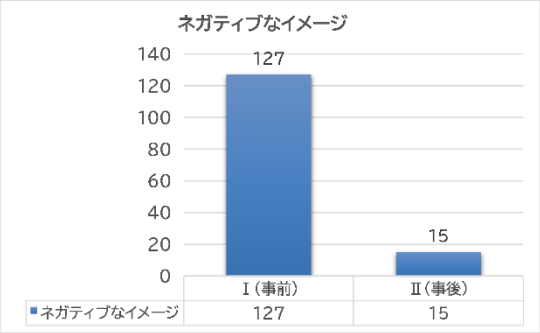




新ビデオ学習後の、障がいのある人のイメージの変化

	Ⅰ（事前）	Ⅱ（事後）
ポジティブなイメージ	133	257
ネガティブなイメージ	127	15





６．まとめ

本プロジェクトでは、共生社会実現に向けて、教育現場で活用するための教育動画と動画を活用するためのテキストを制作し、それらを小学校で実践活用しながら評価、改良、再評価の手順を踏み、ブラッシュアップさせていく試みを行った。評価にあたっては、有識者（大学教授・講師）による評価、授業を受けた子供たち、教員に対するアンケートなど複数の手法を用いて、多角的な視点から分析を行った。

その結果、有識者からは、動画（特に改良後の動画）に対する高い評価を得ることができた。具体的には、道徳・総合的学習・福祉等の教科で有効であり、小中学校、高校とそれぞれのフェーズで教材となりうる、多様な人が一緒に、そして楽しみながら生活できる社会について考えられるなどの特徴があり、これからのインクルーシブ教育に適した教材であることを指摘していただいた。

それらの動画を小学校の授業で用いた結果、授業の前後で、子供たちの障がい者に対する意識が大きく変化（ポジティブなイメージへの変化）することを確認できた。この結果は、この教材が、現在の社会にある「障がい者＝かわいそうな人」という固定観念を壊し、障がいの有無に関わらず、対等な立場で共生していくための前提づくりに貢献していることを示している。また、教員アンケートの結果を見ても、新旧ビデオともに、「テキストの使いやすさ」「共生社会の理解」「生徒への伝え方の理解」「生徒の理解」など、総じて「やや評価する」以上の高い評価を得ている事が分かる。

以上の結果から、教育現場で共生社会の在り方を考えるという、本事業の目的を、達成する事ができたと考えられる。今後の課題としては、学年別の理解度（特に小学校低学年の理解度）に応じた学習目標を設定することや、パラキャンスタッフが一緒に授業を行わなかった場合でも、教員が、プログラムの意図を理解しテキストと動画を使った授業を進められるようになることがあげられる。

Supported by
日本財団
THE NIPPON FOUNDATION

Para Can
見方が変わる、生き方が変わる。パラキャンで

特定非営利活動法人パラキャン
〒277-0082　千葉県柏市緑ヶ丘8-1-202
ＴＥＬ：０４－７１６９－６４２３